

+

ツ、お米、コーヒー豆も
「バルク・ビンズ」で量り売り
容器は持参か購入

ドイツではリサイクル不可のプラスチック容器に対し、小売店やメーカーに廃棄処分費用の負担を課す「容器包装廃棄物法」の導入が2019年から予定されている。

環境問題に対する意識が高いイメージのドイツだが、実はプラスチックごみの年間生産量はEU平均（31・1kg）を上回っており、一人あたりの平均は37・4kgだ（EU統計局、15年の調査による）。そんなドイツで今、静かな広がりを見せてるのが「パッケージフリー運動」だ。これは、ゼロ・ウェイスト運動（※）の流れを汲む、プラスチックごみを回避するライフスタイルの提唱を指す。

こうした動きを受けて、ドイツで最初のパッケージフリー ショップが北ドイツのキールに

店を開きたい人たちのために具体的なアドバイスと基本情報を提供している。便利なプラスチック製品に閉ま



みをなくそう。 ジフリーショップ。

ていた——。そんなショッキングなニュースが今年に入って「パッケージフリー ショップ」がドイツで広がりを見せている。

と、オーナーのラモーナさん（32歳）は語る。小さな店舗の中で目を引くのが、壁一面にずらりと設置されている、バルク・ビンズと呼ばれる円筒形の透明なケースだ。ナッツや米などの穀類、コーヒー豆やパスタなどを、お客様がセルフサービスで自由に量り、買うことができるというシステムで、パッケージフリー ショップのシンボル的な存在でもある。店の中央には有機栽培の野菜や果物。このほか、小麦粉や砂糖、クッキー やチョコレートも量り売りされ

ている。お客様はめいめいが、自宅から空き瓶やタッパーを持参、または店で容器を購入することもできる。

パッケージフリー のコンセプトは食料品だけではない。仕切りを隔てて隣のコーナーには、生活用品がずらり。石けんや固体シャンプー、竹を素材に用いた

SNSで瞬く間に拡散、地域の話題に



店内の秤で重さを量り、出てきた値段シールを貼ってレジへ持っていく仕組み

れて生きることに慣れ切った私たちが、

回避して生きることに慣れたのか？ 南ドイツのアウグスブルクにあるパッケージフリー ショップ「ルタナトウア」を覗いてみた。

市街中心部の片隅の、ちょっと目立たない通りにルタナトウアはある。「偶然通りかかるて入ってくるお客様は少ないです。大半がこの店の存在を知つて目指してくる人たち」

店の存在を知つて目指してくる人たち

通りかかるて入ってくるお客様は少ないです。大半がこの店の存在を知つて目指してくる人たち



た歯ブラシ、そして再生紙で作られたトイレットペーパーも、ビニール袋に入れずむき出しの状態で並んでいる。

ラモーナさんは数年前、旅行代理店に勤めていた時にキールのワークショップに参加。16年8月

にルタナトウアをオープンさせた。「10代の頃から、環境問題や食の安全などに人一倍関心がありました。今では、私みたいな考え方一般になりましたけれど、田舎の小さな町で育ったので、ちょっと変わり者扱いされていたのを覚えています（笑）。大人になつてからも、環境のためによいことをしたいという思いがずっとありました」

ルタナトウアはアーグスブルクで最初のパッケージフリーショップだ。店をオープンした当初、広

い思想ではなく暮らしの環境に意識的になること

（写真と文 見市知）

EU、将来的にプラ製品使用禁止

ルタナトウアで扱っている食品はすべて品質に配慮したエコ認定のものなので、単価は普通のストアーマーケットの商品よりもやや割高だ。たいがいの食品をこの店で調達するという常連の女性に「家計に響きませんか？」と尋ねたところ、「野菜は季節のものを買えばお手頃だし、必要なものは自分で自家製しているので」との答え。彼女はここで大豆を買って、自分で自家製豆乳を作っているのだ

という。また「自分で食べる野菜

は家庭の庭で育てています」とい

う大学生にも出会った。

「お客様からの『こんなものはないのか？』『こんなものを置いてほしい』という要望についても耳を傾けるようにしています」と語るラモーナさんにとって、「パッケージフリー運動」は厳格な思想ではなく、「自分の暮らしにいる環境に対してより意識的になること」だという。そんなルタナトウアは、一昔前の個人経営の食料品店か雑貨屋さんを思い出させる、ちょっとしたプライベートな交流の場にもなっている。同様のパッケージフリー ショップの数は現在、ドイツ国内に70軒以上を数える。

欧州議会は10月に、EU加盟国で使い捨てプラスチック製品の使用・流通を将来的に禁止する法案を可決した。主な禁止対象とされているものはプラスチック製のストロー・や皿、フォークやナイフ、柄の部分にプラスチックを用いた綿棒などだ。さらに7月には、米大手コーヒー チェーンのスター バックスが、20年までに世界中の店舗でプラスチック製ストロー使

用の廃止を発表。世の中の流れは確実に、プラスチックごみを発生させない方向へと向かっている。